

明治期にアメリカへ渡った本県出身の女性医師

— 須藤カクと2人の共働者 Dr. ケルシーと阿部ハナ —

保 村 和 良*

Kaku Sudo, An Unknown Japanese-American woman doctor of the Meiji Period:
Her co-worker, Dr. Adaline D. H. Kelsey and Dr. Hana Abe

Kazuyoshi YASUMURA*

Key words : 須藤カク	Kaku Sudo
アダリン・ケルシー	Adaline D・H・Kelsey
阿部ハナ	Hana Abe
明治期	Meiji Period
女性医師	woman doctor

はじめに

厚生労働省調査によると全国届け出医師数は295,049名で女性医師数は55,897名(18.9%)と発表されているが、2000年度以降、医師国家試験に占める割合は30%以上となり女性医師は確実に増加しつつあるという。(「公益社団法人日本女医会」)

1850年にアメリカのハーバード大学の医学部で、女性を入学させようとしたところ、男性の学生団体の根強い反対運動に合い実現しなかった。アメリカで初めて女医になったのはエリザベス・ブラックウエルであるが、医学校が女子学生を歓迎しなかったことは、日本と全くかわらなかった。明治時代の日本で女性が医師になるは、ほとんど不可能であったと言っても過言ではない。

本稿でとりあげる須藤カクの名前は阿部ハナと共に外国医学校出身とのみ記載されている。『日本女医師主要年表』(日本女医師会編)

須藤カクと常に行動を共にした阿部ハナとケルシーについても述べなくてはならない。彼女達が生きた明治の日本とアメリカ、そして二人の人生の大半を物心両面にわたり支えた医療宣教師ケル

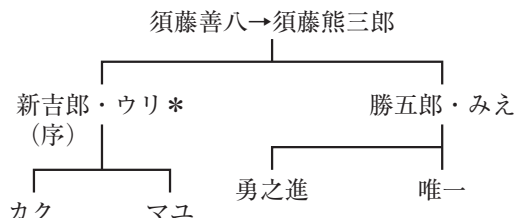
シーは当時の中国と日本でどのような働きをした人物であったのか。さらに、明治の日本人女性にアメリカでの医学教育を受けさせた目的は何であったのだろうか。

須藤カクと阿部ハナの選んだ道は日本ではないアメリカで女医師として生きていくことであった。本稿は3人の軌跡をたどることを直接の目的とする。

1 須藤カクの生い立ち

家系

須藤カクは1861年(文久1)6月26日父、序(ツイジ)母(ウリ)の娘として弘前・大浦町で生まれた。父親の新吉郎(天保2年生まれ)はカクが生まれた頃には「序」と改名している。家系図を示すと次のようになる。



新吉郎にはカクの他にマユという姉がいた。マユは成田よそきち(1865年)と結婚、後にカク

*東北女子大学

を頼り一家で1902年に渡米したが、入国検査でマユは眼病（トラコーマ）のために入国できず、日本で死亡した。

*（Record of Vital Staticsによれば、カクの母親の名前は（Yeuri Funita）とタイプされた記録カードに残されている。

父の序は甥に当る唯一と共に明治元年9月野辺地戦争に参加したが、唯一は18歳の若さで戦死、序の兄勝五郎は弘前藩の西洋式帆船の船将をして後に基督者となった。序は青森浦町奉行所に作事役として勤務、後に奉行所は序に土木工学を学ばせるために函館へ派遣した。明治2年6月には、序は民生局庶務掛として勤務し、少属として石神野に新道を開鑿することを建議し、さらに、明治7年4月には防火用の道路の計画実施を実現させ、市街地を測量して道路の計画線に沿って家の建築指導に当たった。明治3年10月須藤序は新城、青森間の国道の建議が承認され、新城、古川間の国道を開通させたことから津軽地方の産出物が容易に輸送されるようになったのである。⁽¹⁾

須藤序は42歳で権少属（十三等）と昇格し、申正月八日付で所属は 租税課・営繕課となった。⁽²⁾

2 青森から横浜へ

須藤カクが受けた初等教育に付いては資料が乏しく詳細に言及はできないが、カクの向学心を読み取れる興味ある資料があるので紹介したい。カクには東京ではない横浜を選択した事情があった。

ミス須藤がたった10歳の時に、彼女の父親は故郷の青森の山地の小さな村から、一人娘を教育の機会に恵まれた東京に行かせようとした。そして彼女も一緒に東京に行って、勉強したいと父親に嘆願した。この520マイルの旅は大変難儀なものであり、男達に担がれた駕籠で旅をしたり、残りの距離は船を使う、父親は娘をこんな大変な

旅に行かせたくはなかったが、娘を可愛がっていたので、結局は娘の希望を認めることにした。東京に到着したが、女子は学校で勉強できないことを知り、失望することになった。偶然に二人のアメリカ人（ママ）が横浜で女学校を開設しているのを知り、入学が許可されミス須藤は大変うれしく思った。Cincinnati Enquire Mar.3, 1895⁽³⁾

さらに、ここにもうひとつ須藤カクに関する記事がある。

陸奥國中へは弘前教会より追々説教所を設置（こしらえ）しく近頃弘前より僅斗（わずかばかり）距離（へだたり）ある黒石に一ヶ所又青森港学へも二ヶ所取設盛んなる伝道を尽力さるるよし、内一ヶ所分営の通路（とお）りなる川堤脇に須藤序（すとう ついで）と云う人の家屋（いえ）を借り受けしと云う（因みに須藤序の娘は三年前より横浜女校■■■追々熱心の信者とのこと今春バラ氏より受洗せられたよし）何れも聴き手人百を以て数うるほど景況よし しかし伝道者も少なく殆ど困却 何れの地方も左こそあるべけれ⁽⁴⁾

3 横浜共立女学校

さて、カクが選んだ学校は当時どのような学校であったのだろうか。

明治4年創立のアメリカン・ミッション・ホーム（亜米利加婦人教授所）は米国婦人一致外国伝道協会から派遣された3名の宣教師達によって設立された学校である。カクが入学した頃は校名が「日本婦女英学校」から「共立女学校」と改称していた。教派を超えて一致協力して共に運営していることにちなんでの命名であった。教育内容は聖書、音楽、英語、国語、数学、科学など、その多くは英語で教えられた。生徒は通学生20名、寄宿生（教職員を含む）52名を数えた。⁽⁵⁾

当時の生徒の様子を詳細にわたり観察していた一人のアメリカ人—Edward Warren Clark がい

た。クラークにその頃の様子を語ってもらおう。

私が横浜で見た最も興味深く、宣教活動に成功を収めているのは、山の手にあるアメリカン・ミッション・ホームです。そこからは、素晴らしい湾と港が一望できます。この「ホーム」ですが、WUMS（米国婦人一致外国伝道協会）から派遣されて来た、三名の女性達によって設立されました。基督教精神によって生徒達を導き、極東の異教の地にあっても、女性としての地位向上の権利を知ることがこの学校の教育目的です。

私は折りにふれて、ミッションホームを訪ねると、その都度温かく迎えられました。このように、日本にいて、本当のクリスチャン・ホームの上品さと心地よさを体験できたことはとても嬉しいことです。さらに、日本の子供たちは常に明るく、いつも幸せそうな様子が私の目に飛び込んできます。子供たちは全員キリスト教の愛に育まれた先生たちの指導を受けています。

右の写真に写っているのが、ミッション・ホームの本館と庭です。3名の婦人達が見えます。芝生の上に座っているのが、アルバニー出身のプライン婦人で、馬車に乗っているのがミス・クロスビーで、出身はポーキプシーです。ピアソン婦人はシカゴの出身で、建物の右端に座っています。

この建物の反対側には校舎があるのですが、この写真には写っていません。この建物の中で日本で初めて「日曜学校」が開かれました。普段はここで、授業が行われますが、礼拝を守ることから一日が始まります。子供たちは教科書と石版を抱えて学校に集まり、英語と日本語による讃美歌をよく耳にするのですが、歌っているその光景はとても愛おしく思われます。

ピアソン婦人は小型のオルガンを弾き、常に日本語と英語の讃美歌を備えておりました。上級生は大変頭が良く、同年の男子と較べても学力的には何も劣りません。

私は時々、東京から化学教材を持ち込んで、生徒たちに化学実験をして見せるのですが、喜びに満ちた顔をしています。実験後の子供たちの質問

からわかることは、常に私が説明した化学の原理を確実に覚えていたことです。なんと、すばらしい事でしょうか。

校舎の隣には、最近完成した二階建ての校舎が別に建っています。この校舎には幼児を含む、子供たちの世話を昔、インドのカルカット・ミッションで働いたことがあるミス・ガスリーが世話をしています。

写真のちょうど左側に広く、緩やかな傾斜の屋根の家が、ブラウン博士の邸宅です。ブラウン博士はもう、18年以上も日本にいる心から信頼のおける宣教師で、今は他の人達と一緒に聖書の翻訳作業をしているところです。ヘボン博士の尊いライフ・ワークである、『和英語林集成』は英語と日本語を勉強している学生や宣教師達にとって助けとなる貴重な辞書です。(以下略)⁽⁶⁾(原英文) 筆者訳

この頃の共立女学校にはまだ入学や卒業制度が明確に定められていなかったためにカクは終了生として扱われていた。『横浜共立学園140年』の年表によれば、最初の卒業証書授与式が行われたのは1882年（明治15）5月31日となっているので、カクが卒業したのは明治15年以前ということになる。

明治12年のWUMS本部への報告したミス・フレッチャーは次のように書いている。

25人の生徒を受け持った彼女は驚きを持って報告している。

試験は五月二十日、二十一日に行われ、生徒達の進歩と習得した知識、懸命に努力して発揮された勤勉さを見て、満足であり、感謝であった。ここでなされた朗読がどんなにすばらしかったか十分お伝えすることは到底できないだろう。(中略) 日本の少女たちは全文を丸々暗記するような驚くべき記憶力を持っている一方で、自由に表現する答えが必要とされる時には自分の言葉を慎重に選ぶ才能を持っている。以前には、彼女たちの能力をこんなに明白に示す証拠はなかった⁽⁷⁾

ところで、この当時生徒達はどのような教科書を使用して勉強したのだろうか。興味のあるところである。一例を挙げれば、『横浜共立学園の140年』の巻末に何か見覚えのある挿絵が目に入り、よく見たら筆者も所蔵している Peter Parley の Universal History (パーレーの『万国史』であった。この教科書は東奥義塾が開学当時、上級生の第一級、第二級のクラスで使用したものと同じものであった。前述したクラークもこの学校の生徒の学力の高さを絶賛しているのもうなずける。しかも、国語以外はすべて、英語で授業が行われていた。

異国情緒豊かな横浜で教育条件にも恵まれた環境の中で実力をつけたカクは宣教師達と寝食を共にした交わりから宗教色の強い寄宿舎生活を経て、素直に信仰の道へ入っていった。カクは明治11年に J・H バラから受洗している。⁽⁸⁾

須藤カクは後に述べるケルシーとの出会いが渡米へとつながっていくのだが、カクの夢は共立時代からすでに未知の国—アメリカへと向かっていたに違いない。ケルシーの並々ならぬ医療伝道への情熱と努力に影響を受けたカクは、後述するようにキリスト教信仰に裏打ちされた医学の道を歩むことになった。医師として再来日したときには、外国の医師免許での診療許可を得るのに困難をきたし、ようやく許可を得たものの、根岸のある病院で医療活動をするを任せられた。しかし、当時の社会状況(仏教徒等の妨害説もある)と WUMS 本部の方針によって日本での医療伝道は中止となったために、ケルシー、阿部ハナ等と共に 1902 年(明治 35) 帰米することになった。

4 A・D・H ケルシーの生涯と医療伝道 (Adaline DeMontall Higbee Kelsey)

ケルシーは 1844 年にニューヨークのウエスト・キャムデンに生まれた。マウント・ホリヨーク神学校を卒業後、ニューヨーク病院の附属女子医科大学で勤務し、後にマウント・ホリヨークの校医として勤務。長老派教会の外国伝道協会より中国

の Tung Chow (同州) へ医療宣教師として派遣されたが健康上の理由で 1882 年に帰米。1885 年に WUMS から再び医療宣教師として横浜の共立女学校に着任。学校とピース・コテージの校医として活躍した。5 年間医療伝道に従事した後、医学教育を受けさせるための身元引受人となって須藤カクと阿部ハナを伴ってアメリカに戻った。⁽⁹⁾ (原 英文)

当時の入国記録カードの「続柄」の項目にはケルシーが Head of Household 「世帯主」となって、須藤と阿部を含む 7 名の「続柄」は Partner (農業共同経営者) となっている。

(Department of the Commerce Bureau of the Census: 1910 Population New York, Oneida)

7 名とは後述する須藤カクの姉の家族(成田一家)を指す。

ここでケルシーの日本での活動を見てみよう。

22 日間の厳しい航海の長旅を終えて横浜の入江に錨をおろした。当時の様子をケルシーは次のように記している。

この月の初めの日に夕日の沈むときに上陸した。昨日大きな偶像である大仏への観光が計画されみんなと共に出かけ、大変楽しい一日を過ごした。(中略) 太平洋の長旅で、海と空だけを見慣れた者には、この美しさは現実とは思えない。既に一人で用を足せるように、少し日本語を覚えたが、来週から語学の勉強を熱心に始めようと思う。『1885 年 12 月 アデリン・D・H・ケルシー医師の報告(1)』(英文)

1885 年 12 月 10 日に来日したケルシーは、実験的に医療伝道活動を開始した。実験的というのは理由があつてのことであつた。それは総理のプラインが協会に学校関連の病院の開設を要求したが許可が得られず、やむなく、プラインは年間契約での医師の雇用許可を得て、校医を頼んだからであつた。ケルシーは本国へ次のように報告して

いる。

1886年（明治19）7月

日本へ来てから診療した件数は267件です。ほとんど厄介な症状でしたが、全て快方に向かっています。一人は「てんかん」でした。癌の手術も大成功を治めました。日本人の医師に招かれ結核患者を二人診療したところ、そこで定期的に診療にあたるように誘われましたが、非常に忙しいので無理だと断りました。私には何の功績もありません。ただ、神様が人の生命を祝福する道具として用いてくださるままに働いています。日本はこれから先50年はミッシヨナリーの働きを必要としています。この国の道徳水準をもっと高くしなければなりません。⁽¹⁰⁾

上記のようにケルシーは日本人や日本の将来のことを思い更なる医療伝道に専念しようと診療所の開設と医療設備のための援助をボードに申し出たが、援助資金を得ることはできず、個人の家の巡回診療にあたるように本部からの指示を受けた。そこでケルシーは生徒2人を助手にして、各所に散在する病人を往診し、時には数マイル離れた遠方にまで出かけ1887年には助手の数が6人に増えていた。

以下「医療伝道」報告の記録を見ると、内科、外科の他にもほぼ全科にわたる診療を行い、手術、往診と超人的な働きをしていたことがわかる。項目の中には、今では聞き慣れない「電気治療」を受けた施療患者が相当数いたことがわかる。

1887年（明治20年）

1126人

手術	31人	その他	269人
内科	700人	投薬	3487
眼科	107人	往診	949件
耳科	19人		

1888年（明治21年）

1456人

外科	55人	その他	376人
内科	765人	電気治療	5583
眼科	207人	往診	961件
耳科	53人		

伝道用パンフレット配布 3000

1890年（明治23年）

1664人

外科	51人
眼科	239人
往診	1013件

1000戸の村に3000枚のパンフレットとカードを配布)⁽¹¹⁾

ケルシーの医療伝道報告によく見られる「電気治療」であるが、彼女はこれによって患者を救ったと報告している。

（中略）…新患のほとんどは、どこでも厄介な病状で、薬が効かないが、電気治療によってのみ快復できるので、まだ希望を失っていない。私の生徒たちが助手をしてくれ、彼女たちは実践を重ねている。「 그레이の解剖学」と「フリンの生理学」を彼女たちそれぞれに一冊ずつ送っていただけたら非常にうれしいのだが。春に学生たちが卒業すると、ニューヨークの古本屋で、安く手に入ると思う。⁽¹²⁾

診察数	824人
往診	469件
電気治療	2916人

*電気治療について

『電気療法 種々の電流を人体に通じ、神経や筋肉に対する電気の刺激あるいは鎮痛効果、電流による熱発生を治療の目的に利用する方法。歴史的には大変古いものであり、すでに18世紀から神経麻痺、リュウマチ、痛風などに試みられた（中略）第二次大戦中にその効果が検討されたが、結果は否定的であった』（『世界大百科事典 21 平凡

社』

上記の医療活動に加えて、ケルシーは夏季休暇中を利用して日光近辺の保養地で医療活動を行った。1890年のannual reportによると次のような報告をしている。

1890年の休暇には、助手を伴い医療器具、福音書、聖画、トラクトを携えて地方へ出かけ、約1000の町村を回り、病人の治療をするとともに、病人の心を信仰へと導きました。
『横浜共立学園120年のあゆみ』p78

1890年11月12日のWUMS理事会は日本での医療活動を中止し、ケルシーを本国へ召還することを決議し、同時に医療伝道活動も中止となった。上記のWUMC報告のなかで「数名の助手」のことを記しているが、その中にはケルシーの助手として働いた須藤カクと阿部ハナがいたことと推測できる。

1891年にケルシー、須藤、阿部の三名は渡米することになり、ケルシーの経済的援助によって1893年に二人はLaura Memorial Medical Collegeに入学し医学の勉強に励んだ。

二人はウエスト・カムデンにあるケルシー家代々の酪農場(Daisy Farm)に寄寓し苦勞の末、無事医学校を卒業できたわけだが物心両面から援助したケルシー家の良き思い出と共に当時は日本へ戻る気持ちでいたことがわかる。卒業した当時の二人のことを新聞記事は次のように報じた。

Miss Kaku Sudo and Miss Hana Abe, two young Japanese women, have just graduated from the Laura Memorial Medical College in Cincinnati, after taking the four year course.⁽¹³⁾

現在とは時代も教育制度も異なるので単純に日本の医学部とは比較はできないが、記事によると4年コースとなっている。詳しい授業内容までは

わからないが、いずれにしても当時の明治の日本女性がアメリカの医学部を卒業できたことは驚愕に値すると思う。

メモリアル・カレッジについて

ケルシーの勧めにより須藤カクと阿部ハナが学んだローラ・メモリアル・カレッジとはどのような大学であったのだろうか。

この大学は1887年に開かれ、3人の女性医師が大学の地下に慈善病院を開設したのが、始まりで当時は有名なカレッジであった。

1894年にアレキサンダー・マクドナルド夫妻が西6丁目の所有地を買収し、彼らの娘のローラ・ステイロを記念して病院として寄贈した。小児科や女性達のための必要性の声がたかまり、医療と共に、女性の医療の専門家を育てるための施設でもあった。

時を経て名称が変わり、ローラ・メモリアル大学は州立女子医科大学、長老派附属病院、そして女子医科大学などと、名称が色々と変わった。状況の変化により、やむなく、1903年には閉校するに至った。所有者、所有権も続けざまに変わり、1925年には、Good Samaritan Hospitalがセトン・ホスピタルを吸収合併したが、存続できなかった。⁽¹⁴⁾ (原 英文)

5 中国におけるケルシーの働き

1878年、ケルシーは中国のTung Chow(同州)にむけて長い旅がサンフランシスコからはじまった。それは想像を絶する死を覚悟するほどの女性の一人旅であった。

サンフランシスコまで大陸を越え、最新式の蒸気船に乗り込み20日間の航海の旅をしました。船の揺れは想像を絶するもので、船酔いに勝つことはできませんでした。上海行きの商船—この船には乗務員は乗り込んでいませんでした。女性の客は2名だけだったので、そのために乗り換え

が必要となり、横浜で8日以上も足止めされてしまいました。船長は嵐にあって船の機械が壊れて駄目になった時のことを言い出した時に、彼女はもし船が沈んでも海水の温かいところに沈んでくれるように祈りました。(原英文)

(Mount Holyoke College Archives and Special Collection)

1878年10月8日

中国のChe Fooに漸く到着しましたが、ひどく疲れ、惨めで一人ぼっちのアデレンをTung Chowへ出発するまでの11日間何かと世話をしてくれたのは、スコットランド人に医師でした。Tung Chowへの旅はこうです。荷物はラバの背中にハンモックのように両方に荷物を掛け渡して出かけました。この旅の様子ですが、一行はラバに荷物を積み、ラバを制御する人夫が2人、中国人の召使が2人いますが、この一行の中には英語を話せる人は一人もいません。彼等をしかることもさえできないので、何が間違いなのか全然解かってくれないのです。(原英文) 出典：同上

中国 Tung Chow に着く

医療活動の状態 500人の患者の治療にあたる。

Tung Chowは人口8万人の都市です。女子のための学校(18歳から21歳までを対象に化学、哲学、代数を教えている)を営んでいる、キャップス夫人のところに引越をしました。

最初の3ヶ月間で500人の患者を治療しましたが助手の看護婦を雇う余裕がなかったので、薬剤の調合もすべて一人で行いました。(原英文) 出典：同上

山岳地帯での医療伝道と中国人

1880年にアデリンとキャップス夫人は料理人1人、運搬人4人(イスを運ぶ為の必要な人夫)それにラバの御者を連れて、医療宣教地として適しているかを視察するために山や、溪谷を越えて行く厳しい旅に出かけました。アデリンは125人もの患者を診ました。持って来た衣類をすべて出

して着込んでも寒さをしのぐ事ができないほど厳しいところでした。

中国人の中で生活することは、厳しい寒さから身を守ると同様に自分の心が崩れるのを持ちこたえる厳しさがあります。中国人は「集団」の中で育てられるので一人でいたいという「個人」を理解することがどうも、できないのです。アデリンの部屋は薄暗く、陰気で、湿気がひどいのです。そのために、喉の痛みと、神経痛を抱え、本当に惨めな気持ちになり、落ち込んでしまいました。町には椅子の駕籠に乗って帰りましたが、到着した時には体調が悪く、召使に薬を用意させるために数時間、町に帯在しました。(以下略) (原英文) 出典：同上

このように、アデリンは健康を害し心身共に疲れ、中国を後にした。1882年9月のことであった。アメリカに戻ったアデリンはニューヨークのクリフトン・スプリングで二夏を過ごし、1885年に再びアメリカを離れ、英国の蒸気船「ゲーリック号」で、横浜へ向かった。横浜共立での献身的な働きは上述した通りである。

アデリン・ケルシーは病む人々の為に身を捧げ、極東の国々へ福音を伝え、現地での生活を描写している報告を読む者に感銘を与える。もっと注目され研究されてもよい女性だと思う。このような忍耐と使命感を持って医療伝道に奉げ、須藤カクや阿部ハナに医者となり医療に捧げられる人生を送れるように医学を学ばせたのであった。

アデリンは1931年87歳の生涯を閉じた。献身と謙遜を貫いた完全なる人生であったといえよう。

6 阿部ハナについて

阿部ハナに関する資料は日本には資料はほとんど、残されていないが次に紹介する新聞記事に2人の名前があった。

(MISSIONARIES' ILL-FORTUNE Special to The New York Times June 12.1900, Wednesday Page1)

3人が、3年間働いた Negishi Hospital（根岸病院）を辞め、新たに診療所を始めたこと、根岸病院を閉鎖したこと、などが書かれているが、診療所の住所、名称の詳細は記載されていなかったが横浜市立図書館を通して当時の事情を調査してみたが診療所を特定することはできなかったが調査の過程で確認できたことは、当時のケルシーの住所は The Bluff Directory によると（山手 48 B Dr.Kelsey, Rev.J.H.Ballagh）となっていた。

明治 25 年に相沢の貧民街の山の上に、赤く塗られた病院「根岸の赤病院」が建てられたが、創立者・院長は稲垣寿恵子となっており、ケルシー、須藤カク、阿部ハナの名前は出てこない。（『田中亀之助 回心物語』p48）

ところが次の資料には 3 人の名前が出てくる。院長がケルシーとなっていないところから推測すると、上記の病院とは異なる。

横浜根岸なる婦人慈善病院の院長ケルセー嬢を初めとし、之が助手たる須藤カク子、阿部はな子等の諸医師等は非常に親切を盡されて日当たりのよき二階の病室中最良の処に病人を置かれて特別に荒井だい子と云える信者の看護婦を付き添いしめたり⁽¹⁵⁾

上記の三人 アデレン・ケルシー、須藤カク、阿部ハナは 1902 年にアメリカへ戻り再び日本の土を踏むことはなかった。

阿部ハナはペンシルバニア州の Enteropathic Institute of Philadelphia に入学し、同大学を卒業。ケルシーの住む Camden とは隣村である Westdale で Allopath*として活躍し、地域住民からも信頼されていたようだが、1911 年 2 月 15 日死去。須藤カクとは共立女学校以来の最も近い親友であり常に行動を共にしてきた間柄であり熱心な長老派教会の会員であった。⁽¹⁶⁾

* Allopath（逆症療法：治療されるべき状態とは逆の状態を起こして治療する方法）

『医学英和辞典』（研究社）

7 須藤カクとその家族

須藤カクにはマユという姉妹がおり成田ヨソキチ（1865 年 3 月 15 日生まれ）と結婚し、6 人の子供たちがいた。「1910 年 第 13 回国勢調査 オネイダ郡」の Census をみると、ケルシーが Head of Household となって須藤、阿部と以下成田ヨソキチとその家族の記録が残っていた。⁽¹⁷⁾

Census で判明した事を簡単に述べると次のようになる。

① 入国日時から

ケルシー達と成田一家は全員同じ年に渡米したのではないこと。ケルシーの滞日は 1885 年から 1890 年である。

須藤カクと阿部ハナの入国も 1890 年

② 成田ヨソキチとマユ夫婦も同年渡米したがマユは眼病（トラコーマ）のために入国できず、送還された。帰国後日本で死亡したため、残りの家族が 1900 年に渡米した。末っ子のスエとジンはもう少し後の入国のようである。（年代の数字が解読不能）

③ 入国当時の年齢

ケルシー	66 歳
成田ヨソキチ	43 歳
須藤カク	41 歳
阿部ハナ	37 歳
成田コウイチ	20 歳
成田ジン（女）	15 歳
成田レン（女）	13 歳
成田スエ（女）	9 歳

④ 渡米後の職業

ケルシー、成田ヨソキチ、成田コウイチの 3 名は農業（酪農）となっていた。

8 引退後の須藤カクとアメリカ人として 永住権をとった喜び

1923 年（大正 12 年）に引退したカクはフロリダ州のセント・クラウドに移り住み。彼女の姪にあたるジーンの家族もフロリダのウエスト・パー

ムビーチからやって来た。引退後は開業はしなかったが、セント・クラウドでは皆から女性医師としていつも「ドクター、ドクター」と呼ばれ、尊敬されていた。家族の住所はコネチカット通り1100番で、1978年まではそのまま家は残されていた。

アメリカ人として生きた須藤カクは1904年にニューヨークのウエスト・デールに一先ず落ち着いたが、セント・クラウドに移り3人の姪たちの為に家を建て、彼女はセント・クラウド第一バプテスト教会の会員としての信仰生活を送るようになった。カクの人生の中で最も悲しく、切ない出来事は1944年に442連隊に所属していた甥のケンジロウを戦争で失い、続いてジュンを兵役中にヨーロッパで戦死したことであった。当時、アメリカに住む日系アメリカ人家族は移民帰化法案が議会を通過するのを固唾を呑んでみまっていた。

1953年7月10日（火）の地元の新聞（The St.Cloud News）は次のように報じた。

須藤カクさんにとって、長年待ち望んだアメリカ人としての夢が今週の水曜日に実現しました。

日本生まれの92歳になる小柄でかわいい須藤カクさんは長年にわたりセント・クラウドに居を構えて以来、市民から慕われ愛されてきました。水曜日に彼女は市民権を得てアメリカ人となりました。オーランドにあるアメリカ地方裁判所でベイカー判事による宣誓式が執り行われました。この日は彼女にとって長年にわたり抱いてきた夢が実現した最高の日でした。今日に至るまで、高年齢と移民帰化としての必要書類の不備がその理由であったために実現しませんでした。アメリカ人としての市民権を得ることをほとんど諦めかけていました。

カクさんは帰化することができた喜びと愛するアメリカに対して次のように語ってくれました。

常に私はアメリカの人々と共に今日まで生きてきました。若い頃、日本にいた時から、アメリカ

人を愛していました。私はアメリカの生活様式が大好きで、また、日本以上に親しみを覚えるのです。人生の大半をこのアメリカで暮らしてきました。しかし、心から「アメリカ人」として呼ばれることはありませんでした。（原 英文）

The St.Cloud News Friday July 10, 1953

アメリカ人として波乱万丈の人生を駆け抜けた須藤カクは阿部ハナと同様に恩師アデリン・ケルシー先生の薫陶を受け医学を学び医師として、またアメリカ人として、1963年6月4日102歳の完全な生涯を閉じた。セント・クラウドのマウント・ピース墓地B分譲B区画165-4号に埋葬され、静かに眠っている。

あとがき

初めて筆者が須藤カクの名前を知ったのは2002年5月藤崎在住の佐藤幸一氏(故人)より『須藤勝五郎の生涯 弘前藩士の信仰の軌跡』の寄贈を受けた時、同時に勝五郎の姪に当たる女医須藤カクについて興味を覚え、ぜひ調査してみたいと思ったのが動機であった。手懸りの資料は「七一雑報」から始まったが思うように資料が集まらず半ば諦めかけていたところ『ヨコハマの女性宣教師—メアリー・P・プラインと「グランドママの手紙」』に出会い、著書の安部純子氏に御教示願ったところ、Wilton Heritage Museumの資料をはじめ、貴重な資料の提供や御教示を頂いた。横浜共立学園の資料室からは米国にある関係資料の所蔵機関を教えていただいた。

加えて広瀬寿秀氏も須藤カクに関することをリサーチされておることを知りアメリカ側の資料の所在を御教示くださった。いつの間にか資料が各方面から集まり本稿を曲がりなりにも仕上げることができたことは感謝である。

The St.Cloud Heritage Museum の学芸員のLucille McClure氏からは須藤カクが晴れてアメリカの市民権を取得した時の新聞記事や墓石の得難い写真を頂くことができ、須藤、成田家のこと

を良く知っていた Robert Fisk 氏からはカクの住んでいた家の写真を提供していただいた。

高い理想と情熱に燃え、故国を離れアメリカで活躍し、アメリカの土となった明治期の日本女性の存在を風化させてはならないと思う。須藤カク、阿部ハナ、そして両名の恩師であったアデリン・ケルシーの3名を採り上げてみたが、本県には他にも多くの埋もれた逸材が多くいる。これからも、光の当てられてこなかった人物の調査・研究を続けようと思う。

注

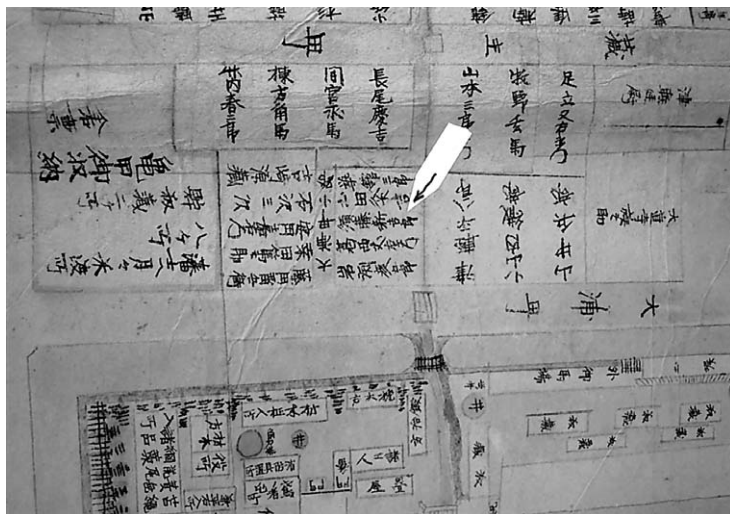
- (1)『青森市史 第五巻 p17』
- (2)『陸奥國青森懸官員録』『青森懸官員録』(岩見文庫)「等外」扱いとして 柴 五郎が給仕として採用されている。手当ては貳両であった。弘前市立図書館蔵
- (3)Cincinnati Enquire Mar.3 1895
- (4)『七一雑報』
神戸で発行されたキリスト教界最初の週刊誌。1875年(明治8)12月27日発行。8巻25号で廃刊。アメリカン・ボードの資金で運営された。
- (5)『横浜共立学園の140年』p24
- (6)Life and Adventure in Japan p220
(Edward Warren Clark 1849-1907)
American Tract Society 15 Nassau Street New York
- (7)『横浜共立学園資料集』第2章『WUMS本部への報告』p95
- (8)須藤カクの受洗については「横浜海岸教会」所蔵の原簿にて判明したものである。
『1877年(明治10)10月2日ジェームス・バラ宣教師より受洗。赤字で「明治28年3月2日 米国オハイオ州シンシナチ長老教会へ』この受洗名簿は同ページの裏と表になっている。前後の記録から明治10年10月は間違いない。
- (9)Pioneer History of Camden,N.Y 1897 p328
- (10)『1885年12月 アデリン・ケルシー医師の報告(1)』
- (11)『横浜共立学園120年のあゆみ』p77~78
- (12)『横浜共立学園資料集・第3章』1887年1月 p206~207
- (13)New York Times “Women and Children”May 3, 1896
- (14)A guide to the city and its neighbors “The Ohio

- State Archaeological and Historical Society”
- (15)山鹿旗之進『封永生』p104
 - (16)New York Genealogy Trails
Deceased New York State of Physicians
1804-1924
 - (17)Department of the Commerce Bureau of the Census Thirteenth Census of the United States: 1910 Population New York, Oneida ニューヨーク州・オネイダー郡の人口調査である。この記録リストによると8名が共に入国していたことが判明したが手書きによるもので判読困難。ケルシー以外に須藤カク、阿部ハナ他の4名は何れもカクの義兄、姪、甥達であった。

St.Cloud Genealogy Club of Osceola County
より資料提供。

参考文献

- ・(Record of Vital Statistics) Robert A. Fisk
- ・Genealogy Club of Osceola County,St.Cloud Florida
- ・Mount Holyoke College Archives
Adaline D.H. Kelsey papers, 1878-1904
- ・Encyclopedia Americana 4
- ・New York Genealogy Trails
Deceased New York State of Physicians
1804-1924
- ・Memories of Old Wilton
- ・『第三十回同窓會々報』共立女学校
大正11年7月
- ・『青森市史・第六巻 第九章上下水道事業』
- ・『青森市史4 産業編 別冊』
- ・『承昭公史傳卷之一』
- ・『津軽近世史料7』
- ・『弘前藩記事 五』
- ・『うとう』創刊 第50 記念号
- ・『写真で見る東奥義塾120年』東奥義塾
- ・『安齊丸船将 須藤勝五郎の生涯 弘前藩士の信仰の軌跡』佐藤幸一
- ・『本多庸一』青山学院
- ・『弘前教会五拾年略史』
- ・『横浜共立学園資料集』横浜共立学園
- ・『横浜共立学園の140年 1871-2011』
- ・『横浜海岸教会』所蔵資料
- ・『キリスト教歴史大事典』教文館
- ・『青森県海外移住史』青森県



明治二年弘前絵図 (弘前市立図書館蔵)
 明治二年十月現在圖 四十分ノ一
 須藤新吉郎宅は蔵主町と大浦町の間に
 あった。

フロリダ州セント・クラウド市
 マウント・ピース 墓地に眠る須藤カク
 ク (学芸員の McClure 氏より提供)
 2009年9月15日撮影



Dream of A Lifetime Fulfilled For Miss Kaku Sudo As She Became An American Citizen Tuesday



セント・クラウド ニュース
 1953年7月10日 (金) 発行
 The ST. CLOUD HERITAGE MUSEUM
 (学芸員の McClure 氏より提供)